

331. 34-Ma59-9gウ



1200500737305

134
59
8

三庫
賃労働と資本



始



解放文庫

(3)

賃労働と資本

マルクス著
堀利彦譯



彰考書院



331.34
MA 59
9g
別

賃労働と資本

マルクス著
堺利彦譯

(一) 労働賃金とは何か

『君は幾ら賃金を取つてゐるか』と労働者に問ふなら、『僕は一日二圓だ』『僕は三圓五十二錢だ』といふ風な答を聞くだらう。労働者の働く仕事は色々に違つてゐるが、とにかく彼等は何かの労働をして、その労働の何程かの時間、或は何程かの分量に對し、雇ひ主たる資本家から何程かの金額を賃金として受取つてゐるのである。

だから資本家は貨幣で労働者の労働を買ひ、労働者はその貨幣に對して労働を資本家に賣つてゐるやうに見える。けれども、それは間違ひだ。労働者が資本家に賣るのは、

目次

(一) 労働賃金とは何か	一
(二) 商品の價格は何で定まるか	八
(三) 賃金は何で定まるか	一五
(四) 資本の性質とその成長	一八
(五) 賃金労働と資本との關係	二四
(六) 賃金と利潤の關係	三二
(七) 資本と労働との利害は正反對	三七
(八) 資本家仲間の競争の影響	四三

労働そのものではなく、労働力（即ち労働する力）である。資本家はその労働力を、一日分、一週間分、一月分といふやうにして買ふのである。そして資本家はその労働力を買った後、労働者に約束の時間だけ労働させて、その労働力を消費する。それは丁度、砂糖を買った後、それを嘗めつくして消費するのと同じことである。資本家は二圓なら二圓の金で砂糖屋の砂糖を買ふことも出来るし、労働者の労働力を買ふことも出来る。そこで假りに二圓の金で五斤の砂糖が買へ、また、十二時間分の労働力が買へるとすれば、二圓は即ち砂糖五斤の価格であり、また労働力十二時間分の価格である。かやうにして、砂糖が商品であると同しく、労働力も商品である。たゞ砂糖は目方で計られ、労働力は時間で計られるだけの違ひだ。

右の通り、労働者は自分の商品たる労働力を、資本家の商品たる貨幣と交換する。（貨幣も一つの商品である。）たとへば、労働力十二時間分の使用に對して二圓といふ取引である。しかるにその二圓といふ貨幣は、實は、二圓で買へるだけの他の品物を代表して

ゐるにすぎない。だから労働力が二圓の貨幣と交換されるといふことは、即ち二圓だけの値打のある他の色々な商品と交換されることである。従つて資本家が労働者の一日の仕事に對して二圓の賃金を拂ふのは、即ちその労働者に若干の米、若干の野菜と肉、若干の衣服、若干の炭薪を與へるわけである。故にその二圓の金は、労働力が他の諸商品と交換される割合、即ち労働力の交換価値を示すものである。そして商品の交換価値がかやうにして貨幣で示された時、それを價格といふ。だから労働賃金はつまり労働力の価値にすぎない。世間では普通にこれを労働の價格といふけれども、それは間違ひで、實は人間の血と肉との中に盛られてある労働力といふ一種特別な商品の價格である。

試みに一つ織工の實例をあげて見る。資本家が織工を雇つて、それに機と糸とを當てがふ。織工はその機を使つて労働し、その結果、糸が織物になる。資本家はその織物をとつて二十圓に賣るとする。この場合、織工の賃金は、自分のつくりあげた織物、もしくはその賣上金たる二十圓の分前であるかといふに、決してさうではない。織工は織物

の賣れないずつと以前に賃金を受取つてゐる。資本家は織物の賣上金の中から賃金を拂ふのでなく、以前から持つてゐた貨幣の中から拂ふのである。資本家は織物を賣つて大いに儲けることもあり、損をすることもある。けれどもそれは織工に何等の關係もない。資本家は元來、糸や機を買入れると同じやうに、労働力を買入れたのである。そしてその自分の所有する原料（即ち糸）と、労働用具（即ち機と織工）とを使つて、織物を生産するのである。織工はの場合、機と同じ労働用具である。織工が生産物たる織物の分前にあづからないのは、機がそれにあづからないと同じわけである。

故に労働賃金なるものは、労働者が自分の生産する商品に對して受けるところの分前ではない。それはたゞ資本家が労働力買入のために兼て用意してゐたところの貨幣の一部である。

そこで要するに、労働力はその所有者たる賃金労働者が資本家に賣るところの商品である。しかし、労働者はなぜそれを賣るのか。賣らなければ生きて行かれないからである。

る。

尤も、労働力を働かすこと（即ち労働）は、労働者自身の生命の活動である。しかるに彼はその生命の活動を、自分の生活資料をうるために、他人に賣るのである。だから彼の生命の活動は、彼にとつては、たゞ生存のための一手段にすぎない。彼はたゞ生きんがために労働するのである。労働そのものは、彼自身の生活でなく、むしろ生活の犠牲である。したがつて彼の活動の産物はその活動の目的でない。彼が自分のために生産するのは、その織るところの絹布でもなく、その採掘するところの金塊でもなく、その建築するところの宮殿でもない。彼が自分のために、生産するのは、一にたゞ賃金である。だからその絹布や金塊や宮殿が、彼にとつては、木綿の着物に變り、銅貨に變り、棟割長屋に變るわけである。種々の労働者が一日十二時間も、或は織り、或は紡ぎ、或は掘り、或は運び、或はロクロを廻し、或はシャベルを使ひ、或は家を建て、或は車を押し、様々な労働をするのは、それは彼の生活でなく、彼の本當の生活は、それらの勞

六
働が済んでのち、食卓において、居酒屋において、寢床において、はじめて開始されるのである。彼の十二時間の仕事はたゞ、彼をして食卓に向かはしめ、居酒屋に入らしめ、寢床に身を横たへしめるためにのみ意味があるので、織つたり、紡いだり、掘つたり、運んだりする仕事そのものは、彼にとつて何の意味もないのである。

しかし労働力は昔から商品であつたのではない。労働は昔から賃金労働であつたのではない。随分古い昔から人間の多數は、或は奴隸となり、或は農奴となつてゐたが、それらは今の賃金労働とは違ふ。奴隸は自分の労働力を主人に賣つたのではなく、労働力と一緒にからだごと主人に切賣りにしたのである。彼はその全身を一の主人から他の主人に譲り渡される商品であつた。即ち彼はまさに牛馬と同様であつた。次に農奴は土地に附屬し、その土地の領主に向かつて收穫を納めるものである。即ち彼は領主から賃金を受けるのでなく、領主の方が彼から年貢を取り立てるのである。しかるに今日の謂ゆる自由労働者は、自分自身を切賣りにする。彼は毎日、自分の生命の何時間分かを資本

家に賣り渡す。労働者のからだは奴隸とは違つて何人の所有にも屬せず、また農奴とは違つて土地にも附屬してゐないが、その代り、日々の生命の八時間分、十時間分、十二時間分、甚だしきは十五時間分が、それを買取つた人の所有に屬する。もつとも、労働者は自分がいやと思へば、なんときでも雇主のところを去ることが出来る。また資本家は、自分の都合次第で、なんときでも労働者を解雇する。そこが自由労働者と呼ばれる所以である。しかし労働者の所得の唯一の源は、労働體力の賣却にあるのだから、彼が生きてゐたいと思ふ以上、その労働力の買手たる資本家の階級と全く縁を切るわけに行かない。彼は甲とか乙とか丙とか丁とかいふ、特定の資本家には隸屬してゐないが、資本家階級の全體に隸屬してゐる。だから、労働者はやはり一種の奴隸、即ち賃金奴隸である。

さて、これから進んで、更に資本と労働との關係をくはしく話すのだが、それにはまづ、賃金の額が何で定まるかを考へて見ねばならぬ。ところが、賃金は(前にいふ通り)

勞働力といふ商品の價格である。そこで勞働力の價格が何でまゐるかを考へるには、まづ一般の商品の價格が何でまゐるかを考へる必要がある。

(一) 商品の價格は何でまゐるか

凡そ商品の價格は何によつて決定されるか。

買手と賣手との間に生ずる競争、即ち需要と供給との關係によつて決定される。そしてその競争に三つの種類がある。

第一は賣手同士の競争。彼等はみな同じ商品を賣らうとする。そしてなるだけ多くそれを賣らうとする。出来るなら他の賣手を排斥して自分ひとりで賣らうとする。従つて銘々が他よりも安く賣らうとする。かくて賣手同士の競争が起り、そのために商品の價格が下落する。

第二は買手同士の競争、これも競争の有様は同じことで、その結果は價格の騰貴となる。

る。

第三は買手と賣手との競争。買手は出来るだけ安く買はうとし、賣手は出来るだけ高く賣らうとする。そしてこの競争は、買手同士の競争と、賣手同士の競争と、どちらが烈しいかによつて勝負がまゐる。

たとへば、或る市場に百圓の棉花があつて、同時に千圓の棉花に對する買手があるとす。この場合、需要は供給より十倍だけ大きい。だから買手同士の競争は非常に烈しい。そこで或る買手はよほど高い値段をつけて、他の買手を排斥しようとする。しかるに賣手の方では、敵の陣營内にはげしい競争があるのを見て、どうせ百圓の棉花は全部賣れるにきまつてゐると確信するから、味方の陣營内で下手な競争をやつてはならぬと考へる。そこで賣手の陣營内には俄に平和が來る。そしてみなが申合せて、腕を拱ぬいて買手の陣營に對立し、あくまで價格のせりあげを要求する。

つまり商品の供給が需要に比べて少い時には、賣手側の競争は、甚だ輕くなり、或は全

一〇
くなくなる。そして買手側の競争がそれと同じ割合で増加する。その結果は、大なり小なり価格の騰貴となる。

またこれと反対の場合が甚だ多い。即ち供給の大超過が生ずると、賣手側に死にもの狂ひの競争が起り、それでも買手がさつぱりなく、結局、滑稽なほどの安値で投賣をすることになる。

しかし、価格の騰貴とは何か。下落とは何か。価格が高いとか低いとかいふのは、一たい何を標準にするか。一粒の砂も顕微鏡で見れば高く、五重の塔も、山に比べると低い。価格は需要と供給の關係によつて決定されるとして、その需要と供給の關係は何によつて決定されるか。

試みに誰でもいゝから、出あひがしらの實業家に聞いて見よ。何の躊躇するところなくかう答へるだらう。「私が商品の生産に百圓を費し、そしてその商品を賣つて百十圓を得るなら、それは正當な利潤である。しかるにもし私が百二十圓乃至百三十圓を得るな

ら、それはかなり高い利潤である。もしまた二百圓を得るやうな事があるなら、それは異常な利潤といはねばならぬ。」しからはこの實業家にとつて、利潤の標準となるものは何か。外でもない、商品の生産費である。彼は自分の商品の交換價値が、その生産費以上であるか以下であるかによつて、利潤の上り下り（即ち損得）を勘定するのである。前にいふ通り、価格は需要供給の變動につれて、或は騰貴し、或は下落する。しかるにいま、或る商品の価格が、供給の不足のため、もしくは需要激増のため、著しく騰貴したとするならば、他の商品の価格はそれに比例して下落したことになる。なぜといふに、商品の価格といふものは、その商品を他の商品と交換する時、他の商品を何ほど受取ることが出来るかといふその割合を、貨幣でいひあらはしたに過ぎないものである。たとへば絹布一反の価格が十圓から十二圓に騰貴すれば、金の価格は絹布に對して下落したわけであり、また他の商品も同じく絹布に對して下落したわけである。假りに米五斗が十圓であるとすれば、従來は米五斗と絹布一反と交換することが出来たのだが、今

は米六斗で絹布一反に當ることになるのだから、米の価格は下落したわけである。ところが或る商品の価格が騰貴すると、あの商品をつくれれば大いに儲かるといふので、多くの資本がその商品の生産に向かつてどしどし流れこむことになる。そして今度は、その商品の供給が多過ぎて、価格が下落し、もはや普通の利潤しかえられないことになり、或はその生産費以下に沈むことになる。

しかるに、商品の価格がその生産費以下に下落すれば、誰もいつまで損の行く商賣をつゞけるものはないのだから、今度は多くの資本が、その商品の生産から引きあげられる。そして特別の場合を除く外、その商品の供給が大いに減少して需要と適合し、従つてその価格は再び生産費の水準に上り、或は寧ろ、供給が需要以下に減少して、従つて価格が生産費以上に騰貴する。

かくの如く、資本は絶えず一の事業から移出して他の事業に移入するもので、價格の高いところには移入がありすぎ、價格の低いところには移出がありすぎる。(従つて、供

給は常に生産費によつて決定される。即ち、供給の増減が生ずるのは、いつでも生産費を基礎とした現象である。)別に需要が生産費によつて決定されることを論證する道もあるが、そのことはこゝでは略しておく。

右に述べた通り、需要供給の變動は、常に商品の價格をその生産費に歸着させるものである。もつとも商品の實際の價格はいつでも、生産費の上か下かにあるのだが、その騰貴と下落とは自然に差引きがつくので、或る期間を通じて、景氣と不景氣とを一くるめにして勘定すれば、すべての商品は互にその生産費を標準として交換されてゐる。故に商品の價格はその生産費によつて決定されるものである。

たゞし、この生産費が價格を決定するといふことは、ブルジョア經濟學者のいふやうな意味に解してはいけない。ブルジョア經濟學者はいふ。商品の平均價格は生産費に等しい。それが法則だと。そして彼等は、價格を騰貴したり下落したりするあの動搖混亂を偶然の出來事だと見る。然るにわれわれは、その動搖混亂の法則を認め、生産費の價格

決定を偶然と考へることが出来る。この動搖混亂こそは、實に恐るべき破壊性を帯び、あたかも地震のやうにブルジョア社會の地盤を揺り動かしてゐるもので、その動搖のためこそ價格が生産費との一致を生ずるのである。この混亂無秩序の總計が即ちブルジョア社會の秩序である。そしてその産業的無政府状態の進行中において、またその景氣と不景氣との循環的運動の中において、一方の行過ぎと、他方の行過ぎとが、相互の競争によつて相殺されるものである。(ブルジョア學者が、このブルジョア社會を、混亂のない、平靜なものやうに説くのは大間違ひである。)

そこで要するに、商品の價格は如何にも生産費によつて決定されるのだが、それは、たゞ、生産費以上に騰貴した期間が、それ以下に下落した期間によつて相殺されるがためである。そして勿論これは、個々の事業に對してではなく、その同じ産業部門の全體に對してあてはまるのである。従つてまた、個々の製造業者に對してではなく、製造業者の全階級に對してあてはまるのである。

なほ、生産費が價格を決定するといふことは、商品の生産に要する労働時間が價格を決定するといふことになる。なぜといふに、生産費とは第一に原料と道具の消耗と、第二に直接の労働を意味するが、その原料と道具とは、その生産のために若干の労働日數を要するもので、従つて若干の労働時間を代表するものであり、また直接の労働はもとより時間で計量されるものであるから。

(三) 賃金は、何できまるか

一般の商品の價格を支配する法則は前章でわかつたが、その法則は自然にまた、労働賃金(即ち労働力の價格)を支配する。

即ち労働賃金は需要供給の關係によつて決定される。くわしくいへば、労働力の買手たる資本家と、労働力の賣手たる労働者との間における競争によつて、或は騰貴し、或は下落する。そしてその賃金の變動は一般の商品價格の變動に相應する。しかしその變

働の範囲内において、労働力の価格はやはりその生産費によつて決定される。即ち労働力といふ商品の生産に必要な労働時間によつて決定される。

しからば、労働力の生産費とは何か。

労働者が労働者としての生計を営むために、および労働者としての修業を受けるために、必要な費用がそれである。

故に労働者の修業の時間が短ければ、その労働者の生産費が少く、従つてその労働力の価格（即ち賃金）が安いことになる。見習ひ期間の殆ど必要でない仕事、即ち労働者がたゞそこに體を持つて來さへすればよいといふやうな仕事では、その労働者の生産費は殆どたゞその人を働けるだけにするための必需品に限られる。即ちその人の労働力の価格は、生活必需品の価格によつて決定される。

ところが、こゝに一つ別の考慮が必要になる。一體製造業者が生産費を計算して、それによつて生産物の価格を定めようとする時、必ず労働用具の消耗分を勘定に入れる。

たとへば、千圓で買った機械が十年間で役にたたなくなるものとするれば、一年に百圓づつをその消耗分として勘定に入れおき、十年後に新しく機械を買入れることになる。それと同じやうに、労働者もいつか老衰して役にたたなくなるのだから、その場合、更に若い労働者をそれに代らせるために、平生から労働者に子孫を蕃殖させておく必要がある。従つて労働力の生産費の中に、生殖費用（即ち妻子を養ふ費用）を加算しておかねばならぬ。それはつまり、機械の消耗分と同じく、労働者の消耗分を生産費の中に計上するわけである。

かくて労働力の生産費は、労働者の生活費と生殖費とになる。それが即ち労働賃金である。そしてその賃金が最低賃金と呼ばれる。この最低賃金は一般の商品価格が生産費によつて決定される場合と同じく、個々の労働者にあてはまるわけでなく、ただ労働者階級の全體にあてはまる。個々の労働者についていへば、自ら生活しかつ生殖することの出來るだけの賃金をえてゐないものが、幾らでもある。けれども労働者階級全體の賃

金は、種々の變動を経てゐるうちに、この最低額に合致するものである。

さて、以上において、賃金および一般の商品價格を支配する大體の法則がわかつた。これから更に今少しこまかい研究に進む。

(四) 資本の性質とその成長

資本は原料、労働用具、および諸種の生活資料から成りたつもので、それが更に新たな原料、新たな労働用具、新たな生活資料の生産に使用されるのである。そしてこれらの資本構成物はすべて労働によつてつくられたもの、即ち労働の産物であり、『蓄積された労働』である。

經濟學者は右のごとく説明する。

しかしそれは、ニグロの奴隸を黒人だと説明するやうなものだ。黒人は黒人である。たゞそれが或る条件のもとにおかれて初めて奴隸となる。紡績機械は糸を紡ぐ機械であ

る。たゞそれが或る条件のもとにおかれて初めて資本となる。それらの条件から切りはなせば、金塊がそれ自身では貨幣でないのと同じく、紡績機械は決して資本ではない。

凡そ人間が生産を行ふには、たゞ自然界に對して働きかけるばかりでなく、また人間相互に働きかけるものである。人間は或る方法によつて共同に働き、また互にその働きを交換することによつてのみ生産をなす。即ち人間が生産するためには、必ず相互の間に一定の社會關係をつくる。そしてその社會關係によつてのみ、自然界に働きかける。それで初めて生産が行はれる。

この社會關係と、および人間が相互に働きを交換して、生産行爲の全體に参加するその條件とは、その時々々の生産方法の性質に従つて自然に變化する。たとへば、鐵砲といふ新しい武器が發明されれば、軍隊の組織が必然的に變化するやうなものである。

かやうにして、生産の社會關係は、生産方法の發達、即ち生産力の發達と共に變化する。そしてこの生産上の諸關係の總和が即ち謂ゆる『社會』を構成するのである。但し

その社會といふのは、歴史の發達上における或る段階の一社會であり、特殊な性質を有する一社會である。古代の（奴隸制度の）社會、中世の封建社會、近世の資本家社會、これらみなそれ／＼にその當時の生産關係の總和であつて、人間の歴史の發達上における特殊の段階を示してゐるのである。（つまり、人間の社會は昔から今日まで色々に變つて來てゐるが、それは人間の生産方法が發達するにつれて、生産を行ふについての人間同志の間の諸關係が變つたからである。そしてその生産事業についての色々の關係が集まつて、その時代々々の社會を構成するので、従つて社會に古代、中世、近世などいふ差別が生じ、それぞれ特殊な性質を示してゐるのである。實例でいへば、古代には主人が奴隸を養つてその奴隸に生産をやらせるといふ社會關係があり、中世には大名が農奴を支配してその農奴に生産をやらせるといふ社會關係がある。そしてそれが奴隸制度、封建制度といふ、それぞれ特殊の性質をもち、またそれが歴史の發達してきた階段になつてゐるのである。）

そこで資本といふものもやはり生産上の社會關係である。即ち資本家社會（ブルジョアの社會）の生産關係である。原料、労働用具、生活資料、これらの物から資本は成りたつのだといふけれども、その諸物品は、或る特殊の條件の下において、或る社會關係の中において、産出され蓄積されたのである。またその諸物品は、或る特殊な條件の下において、或る社會關係の中において、新たな生産に使用されるのである。さうしてこの特殊な社會的性質が、即ち右の諸物品に資本のスタンプを押すのである。

資本は原料、労働用具、生活資料だけから成りたつのではない。即ち有形的の生産物だけから成りたつのではない。同時にそれは交換價值から成りたつ。資本を構成する生産物はすべて商品である。故に資本は一定量の有形的生産物であるばかりでなく、また一定量の商品であり、交換價值である。たとへば、毛糸を綿糸に代へ、麥を米に代へ、鐵道を汽船に代へても、資本としてはなんの變りもない。たゞ資本の實體たるその綿糸や米や汽船が、以前の實體たる毛糸や麥や鐵道に比べて、同じ交換價值、同じ價格をも

つておればよいのである。資本の形態はたえず變化しても、資本そのものは何等の變化をも受けなす。

但し、すべての資本は一定量の商品（即ち交換價值）であるけれども、一定量の商品（即ち交換價值）がすべて資本だといふわけには行かない。

交換價值は如何なる分量でも交換價值である。一萬圓の家屋は一萬圓の交換價值である。一枚一錢の紙は一錢の交換價值である。他物と交換されうる生産物はみな商品であつて、その他物と交換される割合が即ちその商品の交換價值である。そしてその交換價值を貨幣で現はしたのが價格である。だから生産物の數量は、その商品たる性質、交換價值たる性質、價格をもつものとしての性質に、何等の影響も及ぼさぬ。木は大きくても小さくても木である。鐵を他の生産物と交換する時、それが一斤であつても千斤であつても、鐵の商品たる性質、交換價值たる性質に變りはない。たゞその數量によつて、價值に大小があり、價格に高低があるだけのことである。

しからば或る分量の商品、或る分量の交換價值はどうして資本になるのか。それは、商品が獨立の社會力として働き、現在の生きた勞働力と交換して、自己を維持しかつ増殖することによつてである。（即ち、勞働者が原料や機械や生活資料の力に使はれて、さらにそれらの商品を製造し増殖するために働かせられる時、それらの商品が資本になるのである。）だから、勞働能力より外に何物をもたない階級（即ち、プロレタリア階級）の存在が、資本にとつて必須な豫備條件である。

過去の勞働、蓄積された勞働、物體化された勞働が、現在の生きた勞働の上に支配力を持つといふことが、即ち「蓄積された勞働」に資本の性質を附與するのである。

資本とは、蓄積された勞働が、生きた勞働のために、新しい生産の手段になるといふことではなく、生きた勞働が、蓄積された勞働のために、その交換價值を維持しかつ増殖するための手段になるといふことである。

(五) 賃金労働と資本との關係

資本家と賃金労働者との間の交換は、どんな風にして行はれるか。

労働者は自分の労働力と交換して生活資料を受取る。しかるに資本家は、自分の生活資料と交換して、労働を受取る。即ち労働者の生産的活動を受取る。即ち労働者が自分の消費した物を復舊するばかりでなく、更に「蓄積された労働」(即ち資本)のために、それが以前持つてゐたよりも、より大なる価値を與へるところの、労働者の創造力を受取る。労働者が資本家から受取るのは、現存せる生活資料の一部であるが、それは何のためか役に立つかといへば、直接の消費である。一體、人が生活資料を消費する場合、その生活資料で生命の支へられる期間を、新しい生活資料を生産するために、(即ち消費された価値の代りに、労働をもつて新価値をつくるために) 使用しないならば、その生活資料は永久に失はれてしまふのである。しかるに労働者はその大切な力を、生活資料と

交換して資本家に引渡すのである。従つて労働者にとつては、再生産力は全く失はれ盡すのである。

一例を擧げてみる。或る日傭取が一日一圓で農家に雇はれ、終日はたらいで二圓の收入をあげるとする。農家の主人は、日傭取にあたへた価値を回収するだけでなく、それを二倍にしてゐる。即ち彼は日傭取にあたへた一圓を生産的に、増殖的に消費したのである。彼は日傭取の労働力を一圓で買ったが、その労働力は二倍の価値ある作物をつくり出すので、彼はつまり一圓で二圓をつくり出したことになる。これに反し日傭取は、自分の生産力を主人に引渡して、その代りに一圓を受取つたが、その一圓は生活資料と交換されて、早かれ晩かれ消費される。故にこの場合、一圓の金は二重の意味に消費されてゐる。資本家としては再生産的に、労働者としては不生産的に消費されてゐる。されば資本なるものは必ず賃金労働を前提とし、賃金労働なるものは必ず資本を前提としてゐる。両者は相互に條件づけられ、両者は相俟つて發生する。

また、木綿工場の労働者は木綿品ばかりを生産するのか。いな彼は資本を生産する。彼は価値を生産する。そしてその価値が、更に彼を支配し、またその支配によつて更に新しい価値をつくり出すことになる。

資本が増殖するには、必ずまづ労働力と交換されて、賃金労働の活動を起させねばならぬ。また賃金労働者の労働力が資本と交換される時には、必ず資本を増殖し、労働者を奴隷にするその力を強めることになる。故に資本の増加はプロレタリア（即ち労働者階級）の増加である。

かくて資本家および資本家経済学者は主張する。資本の利益と労働の利益とは同一である。如何にもその通りだ！ 資本が労働者を使はなければ、労働者は死ぬる。また資本が労働力を搾取しなければ、資本は死ぬる。そして資本は労働を搾取するために、それを買はねばならぬ。かくて生産資本が、速に増大すればするほど、それだけ産業は繁昌し、それだけブルジョアは富裕となり、それだけ世間は好景氣となり、資本家は甚

だ多く労働者を要求し、労働者はかなり高い賃金を取ることになる。故に、生産資本のなるべく速に増大することは、即ち労働者がかなりの生活をするための、必須の條件である。

しかし生産資本の増大とは何か。生きた労働に對する、蓄積された労働（即ち資本）の方の増大だ。労働階級に對する、ブルジョアの支配力の増大だ。賃金労働が自分を支配するところの富、自分に敵對するところの力（即ち資本）を産出する時、労働者雇入れの資料、即ち生活の資料は、再び労働者の手に戻つて来るけれども、その結果としては必ず、その労働が重ねて資本の一部分となり、更に資本の増大を促進する積杆となるものである。

資本家の利益と労働者の利益とが一致するといふのは、ただこれだけの意味である。即ち資本と賃金労働とは、一箇の事實關係（一つの事柄）の兩面だといふことである。それは丁度、高利貸と道樂者とが相俟つて生存するといふやうなもので、一方が常に他

方の條件になつてゐる。

二八

賃金労働者が賃金労働者である間は、どんなにしても、彼の運命は資本にかゝつてゐる。労働者と資本家との間に利害の一致があると稱せられるのは、即ち、そのことである。

資本が増大すれば賃金労働の分量が増大し、従つて賃金労働者の數が増大する。それは即ち資本の支配がいよいよ多數人の上に及ぶことを意味する。そこで最も好都合の場合を想像しても、生産資本が増大すれば労働に對する需要が増大し、従つて賃金（即ち労働力の價格）が増大するといふに過ぎない。

たとへば、こゝに一つの小さな家があるとして、その周囲の家々が同じやうに小さい間は、住宅として別に不足がない。しかるにその小さい家の隣に一つの宮殿が建てられると、その小さい家は如何にもみじめな小屋になつてしまふ。そしてその家の居住者に社會的地位のないことが感じられる。たとへ文明の進歩につれて、その家が段々高く築

きあげられても、隣の宮殿がそれと同じやうに、或はそれより以上に大きくなれば、小さい方の家の居住者は次第々々に不平不愉快の度を増してくる。

賃金がかかりの騰貴を示すのは、必ず生産資本の急激な増大を前提としてゐる。ところが、生産資本の急激な増大は、必ずまた急激な、富の増大、奢侈の増大、社會的慾望の増大、社會的享樂の増大を伴ふ。そこで、労働者の快樂は何程か増大しても、資本家の大快樂に比べ、一般社會の發達に比べると、労働者の感ずる社會的満足は寧ろ減少してゐる。人間の慾望なり快樂なりは、その起源を社會に發するものである。だから我々は、慾望に充足を與へる外物そのものによつて快樂を評價せず、社會的の標準によつてそれを評價する。慾望なり快樂なりは社會的の性質をもつてゐるから、従つて比較的の性質をもつてゐる。（例へば、炎天の氷水一杯が如何に渴きをいやす實効を持つてゐようとも、今の社會では當り前のことである。社會的の標準から評價すれば、氷水など何んでもない。箱根の別荘に避暑してゐるのに比較すれば、快樂などいふほどのもので

そこで賃金は決して、それと交換しえられるところの商品の分量のみで決定されるものではない。それには色々な要素が加はつてくる。労働者が自分の労働力に對して直接に受取るのは何程かの貨幣であるが、賃金はその貨幣價格だけで決定されるかといふに必ずしもさうではない。

十六世紀において、アメリカに豊富な鑛山が発見された結果、ヨーロッパの金銀が増加した。従つて金銀の價值は、他の商品との比較上、下落した。しかるに労働者は以前と同額の賃金（即ち貨幣）をえてゐた。そこで彼等の労働力の貨幣價格は以前と同じであるけれども、その貨幣と交換しえられる商品が以前に比べて少額になつてゐるので、賃金は實際上、下落したわけである。そしてこのことは、その後における資本の増殖、ブルジョアの勃興を助長する一原因になつた。

更に他の場合を考へて見る。一八四七年の冬、凶作の結果として、穀類、肉類、バター

などの價格が著しく騰貴した。この場合、労働者が以前と同じ賃金しかえてゐなかつたとすれば、それはやはり賃金の下落である。彼等は以前と同額の貨幣で、以前より少い生活資料しか買へないのである。

今度はまた、賃金はもとのまゝであるのに、新しい機械の應用、豊作、その他の結果として、すべての農作物や工藝品の價格が下落したとする。この場合、労働者は、以前と同じ金額で以前より多くの商品を買ひうるのだから、實際上、賃金が騰貴したわけである。

そこで労働力の貨幣價格（即ち名目上の賃金）は、必ずしも、實際上の賃金と一致するものではない。故に我々が賃金の騰落を論ずるには、常に名目上の賃金と、實質上の賃金とを、併せて考慮の中に入れねばならぬ。

しかし名目上の賃金（即ち労働者が資本家から受取るところの貨幣額）と、實質上の賃金（即ち労働者がその貨幣で買ひうる商品の分量）とのことを考へただけで、賃金の

意義に關することが盡されるわけではない。

賃金はまた特に資本家の利潤との關係によつて決定される。それを比較賃金、相對賃金といふ。

實質賃金は、労働力の價格を、他の商品の價格との關係上から表示したものであるが相對賃金はこれに反し、いま創造された新價值に對する生きた労働の分前を、蓄積された労働（即ち資本）の分前との關係上から表示したものである。（もつとわかりやすくいへば、相對賃金は、労働者の賃金を資本の利潤に比較して考へた場合である）

（六）賃金と利潤の關係

前に述べた通り、『労働賃金なるものは、労働者が自分の生産する商品に對して受けるところの分前ではない。それはたゞ、資本家が労働力買入のために、兼て用意してゐたところの貨幣の一部である。』けれども資本家は、労働者の生産した商品を賣つて、そ

の價格の中から、前に拂つた賃金を取戻さねばならぬ。なほそれを取戻すについては、彼が支拂つた生産費以上に或る剰餘（即ち利潤）を生ずるやうにするのが原則である。資本家にとつては、労働者が生産した商品の賣上價格は、三つの部分に分たれる。即ち第一は、前拂ひされた原料の價格の回收、および、道具機械、その他の労働用具の消耗の回收。第二は、前拂ひされた賃金の回收。第三は、それ以上の剰餘、即ち利潤。この中、第一の部分は、以前から存在してゐた價值を回收することだが、賃金の回收と剰餘利潤とは、明かに全く、労働者の労働によつてつくり出だされたところの、さうして原料の上に加へられたところの、新價值からえられるものである。そこでこの意味において我々は賃金と利潤とを、労働者の生産物の分前とみて、相互に比較させることが出来る。

實質上の賃金は以前と變化なく、或は騰貴してゐても、それをなほ相對的の賃金の下落してゐる場合がある。たとへば、すべての生活資料の價格が三分の二の下落をしてゐ

るのに、賃金は三分の一しか下落しない（即ち三圓から二圓に下落したとする。）この場合、労働者はその二圓で、以前の三圓のときよりも多くの商品を買ひうるけれども、それでもその賃金を資本家の利潤にくらべてみると、却つて減少したことになる。資本家（たとへば製造業者）の利潤は一圓だけ増加したのだが、それは即ち、彼が労働者に拂ふ交換価値は減少してゐるのに、労働者は以前よりも多量の交換価値を生産せねばならぬといふことである。資本の分前は労働の分前にくらべて増加したのである。資本と労働との間における富の分配が一層不平等になつたのである。資本家は同額の資本をもつて一層多量の労働を支配することになつたのである。資本家階級の労働者階級に對する権力が増加し、労働者の社會的地位が一層下落したのである。

しからは賃金と利潤との相關的の騰落を決定する法則は何か。

両者はたがひに逆比例をなしてゐる。資本の分前（即ち利潤）は、労働の分前（即ち賃金）の下落にとまひ、そのおなじ比例で騰貴する。その逆はまた逆である。換言す

れば、利潤は賃金の下落する程度だけ騰貴し、その騰貴する程度だけ下落する。

右に對し、或はかういふ議論がでるかも知れない。資本家は、他の資本家との間に自分の生産物の有利な交換をして、それで利潤をとることが出来る。或は新市場を開拓したとか。或は舊市場で一時的に需要が増加したとかいふことの結果として、とにかく自分の商品に對する需要の増加によつて、利潤をとることが出来る。だから資本家の利潤は、賃金の騰落（即ち労働力の交換価値の騰落）に關係なく、他の資本家の利益をかすめることによつて増加されうるではないか。なほまた資本家の利潤は、労働用具の改善、自然力の新應用などによつても増加されうるではないかと。

しかし、まづ第一に考ふべきは、賃金と利潤との騰貴する順序が逆様になつたところで、その結果は同一だといふことである。論者のいふ場合では、如何にも、賃金が下落したために利潤が騰貴したのではない。けれども利潤が騰貴したから賃金が（その割合上）下落したのである。つまり資本家は、同じ分量の他人の労働によつて、以前より多

量の交換価値を買いとり、そして労働に對しては、それがために増拂ひをしないのである。だから労働は、資本家のとる利潤にくらべると、以前よりすくない支拂ひを受けてゐるわけである。

次に考ふべきは、前に述べた通り、諸商品の價格に變動があるにかゝらず、各商品の平均價格（即ち他の諸商品と交換される割合）は、常に生産費によつて決定されるといふことである。だから資本家同志の間におけるかすめあひは、必然的に平均するものである。（資本家階級全體がかすめあひによつて利潤を高めうる筈がない。）また機械の改良や自然力の新應用は、以前と同一分量の労働と資本とをもつて、以前より多量の商品を一（一定の労働時間に）生産させることは出来るが、その商品の増加は決して交換価値の増加ではない。たとへば紡績機械の發明によつて、以前より二倍だけ多量の糸が出来るとする。以前五十貫出来たものが、今は百貫出来るとする。その場合、その百貫の糸と交換される他の諸商品の額は、（すこしながい期間についていへば、）以前の五十

貫と交換されたものより多くはならない。なぜといふに、糸の生産費が半減してゐるから（即ち同じ費用で二倍の糸が出来ることになつてゐるから）糸の價格が半分以下落する。従つて商品の分量の増加は交換価値の増加にならない。

最後に、資本家階級が、（一國においてでも、全世界を通じてでも）、生産の純益を如何なる割合で彼等自身の間に分配しようとも、その純益の總額は、いつでも、蓄積労働（即ち資本）の全體が直接労働によつて増加されるだけの額に過ぎない。故にこの純益の總額は、労働が資本を増加させる割合、即ち利潤が賃金にくらべて騰貴する割合、その同 割合において増加するものである。

（七） 資本と労働との利害は正反對

以上によつて、資本と賃金労働との利害が全く正反對であることが分る。

資本の急激な増加はすなはち利潤の急激な増加である。利潤が急激に増加しうるのは

労働の價格（即ち相對的の賃金）が、同じく急激に下落した場合に限られてゐる。（前にいふ通り）たとひ實質賃金が名目賃金（即ち労働の貨幣價值）と同時に騰貴しても、その實質賃金が、利潤とおなじ比例で騰貴しなければ、相對的賃金はやはり下落してゐる。たとへば、好景氣時代に、利潤は三割も騰貴してゐるのに、賃金は五分だけしか騰貴してゐないとすれば、相對的賃金は増加したのではなく、やはり減少したのである。

故に、資本の急激な増加と共に労働者の収入が増加しても、それと同時に、労働者と資本家とを分つところの社會的の溝は益々廣くなる。即ち労働に對する資本の權力を擴大し、資本に對する労働の隸屬がいよいよ甚だしくなる。

そこで、資本の急激な増加が労働者の利益になるといふのは、實はたゞ次の意味である。労働者が急激に資本家の富を増加させればさせるほど、労働者に落ちて來るパンの屑のこぼれが増加し、従つて使役される労働者の數が増加し、資本に隸屬する奴隸の數が増加する。

かくて、労働階級にとつて最も好都合な状態、即ち資本が最も急激に増加した場合でも（たとひ労働者の實生活が、頗る多くそのために改善されても）労働者の利益と資本家の利益との反目は決して除去されない。利潤と賃金とは、以前の通り、やはり逆比例をなしてゐる。

資本が急激に増大すれば賃金も騰貴するだらう。けれども資本の利潤はそれと比較にならぬほど急速に騰貴する。労働者の實生活は改善されるけれども、その社會的地位は低下する。労働者と資本家とをへだてる社會的の溝は廣くなる。

今一つ最後に、生産資本の最も急速な増加が賃金労働にとつて最も好都合な状態だといふのは、實にたゞ次の意味である。労働階級が自分に敵對する權力（自分を支配するところの他人の富）を急速に増大させればさせるほど、彼等が更に新しく資本家の富を蓄積するために働かされ、更に資本の權力を増大するために働かされ、そしてみづから甘んじて、資本家が労働者を引きずるための金の鎖を鑄造させられるのに、甚だ好都合

な状態を生ずるといふのである。

四〇

一體、生産資本の増加と賃金の騰貴とは、ブルジョア經濟學者等のいふやうに、本當に不可分なものであらうか。我々はそれを言葉どほりに信じてはならない。もし彼等が露骨な言葉で資本がふとればふとるほど、その奴隷もらくが出来るといふのだと、いつたとしても、我々は輕々しくそれを信じてはならない。昔の大名などは、金ひかの家來どもを引連れたりすることを誇りとしたものだが、今のブルジョアはそんな馬鹿げた眞似をするには、餘りに醒めてをり、餘りによく計算を知つてゐる。ブルジョアはその生存の必要上、嚴密な計算をせずにはをられないのである。だからわれわれは、次の問題をもつと細かに考へてみる必要がある。

生産資本の増加は労働金に對して如何に影響するか。

ブルジョア社會の生産資本が全體において増加すれば、労働の多方面な集積が起る。資本家はその數と大いさとを増し、従つて資本家間の競争が増す。資本家がますます大

きくなれば、産業界の戰場において、ますます巨大な武器をもつて、ますます有力な労働軍をひきゐることになる。

一の資本家が他の資本家を戰場から驅逐するのは、たゞ安賣をするにある。安く賣るためには安く生産せねばならぬ。即ち労働の生産力を出来るだけ高めねばならぬ。しかるに労働の生産力は主として、分業の進歩と、機械の普及および改善とによつて高められる。そして分業の行はれる労働軍が大なれば大なるだけ、機械の使用される規模が大なれば大なるだけ、それに應じて生産費がますます減少し、労働がますます多産的になる。そこで資本家の間において、盛んに分業と機械とを増加し、それを出来るだけ大規模に搾取しようとする競走が各方面に起る。

そこでもし一の資本家が、分業の増進により、新機械の使用および改善により、また一層有利な、一層大規模な自然力の搾取により、同じ分量の労働をもつて、他の競争資本家に比べて、一層多量な商品を生産する方法を發見して、たとへば、他の資本家が半

反の布をつくる間に、一反の布をつくりうるとしたら、この資本家はどんなことをやりだすか。

彼はその布を元の価格で売りだすことが出来る。けれども、それでは敵を驅逐して、自分の販路を擴張するわけに行かない。彼は今、擴大された生産力によつて、自分の商品をより安く賣ることが出来ると同時に、より多く賣らねばならぬ。即ち、より大なる販路を獲得せねばならぬ。そこで彼はその布を競争者のより安くして賣りだす。

けれども彼はまた、競争者の半反の価格で自分の一反を賣りはしない。生産費からいへば、それでも引合ふわけだが、それでは餘分のもうけがない。それに彼は、ほんの少しでも安く賣りさへすれば、それで敵を驅逐し、少くともその販路の一部分をとりあげることが出来る。

しかしこの資本家の特権は、決して永續するものでない。他の競争資本家も、同じ機械と同じ分業とを、同じ（もしくはより以上の）大規模で採用する。そして遂にはそれ

が一般に行はれて、布の価格は元の生産費以下に下落するばかりでなく、現在の生産費以下にまでも下落する。

そこで資本家は、お互の關係上からすれば、その新しい生産手段の採用以前と全くおなじ状態の下におかれる。競争がまた新規に始まる。一層こまかな分業、一層おほくの機械、一層大規模の搾取。そしてまた以前とおなじ結果を繰返す。

(八) 資本家仲間の競争の影響

以上においてわれわれは、如何に生産の手段方法がたえず變更され、革命されるか、また如何に必然的に分業が一層大なる分業を招き、機械の使用が一層大なる機械の使用を招き、事業の大規模が一層の大規模を招くかをみた。これが即ち資本家生産をたえずその舊軌道から放りだし、その資本をして、いやが上に労働の生産力を緊張させるところの法則である。これが即ち又、資本に對してしばらくの休息をもあたへず、たえず「進

め！進め！」とさゝやくところの法則である。そしてこれが即ち又、景氣不景氣の動搖の間において、商品の價格を必然的にその生産費と一致させるところの、前記のあの法則に外ならないのである。

一の資本家が如何に有力な生産手段を戰場に運びこんでも、競争はすぐにそれを一般化させてしまふ。そしてそれがすでに一般化された以上、その瞬間から、彼の資本が有する大生産力の唯一の結果は、以前と同じ價格で、以前の十倍、二十倍、百倍の品を供給せねばならぬといふことである。しかるに實際では、大量の販賣で賣價の下落を償ふため、彼は恐らく千倍もの販路を求めねばならぬ。それにまた、今度は、多くの利潤をうるためばかりでなく、(生産機械そのものが次第に高價になつてゐるのだから)その生産費を回収するためにも、彼はますます多量の販賣を必要としてゐる。なほまたその販路の大擴張が、彼一人としてのみでなく、競争者たるすべての資本家として死活の問題である。そこで古い競争がまた始まる。そして生産機關が有力なるものに進歩し

てゐればゐるほど、その競争がますます激烈になる。かくて分業と機械の使用とが、一層の大規模をもつて新に遂行される。

ところで、この生産機關の力が如何やうであらうとも、競争は常に商品の價格を生産費に引下げることによつて、その力からの金の卵を奪はうとする。即ち競争が生産を安價にするのと同じ程度において、一層の安價で一層多量の品物を賣ることが、不可抗の法則となる。かくて資本家は自分の努力によつて何物をも益せず、たゞ同じ労働時間内に一層多量の品物を生産する義務を負ふだけである。つまり資本家は、資本の利殖について一層困難な地位に陥るのである。かくの如く、競争は生産費の法則をもつてたえず資本家を苦しめ、資本家がその競争者に對してつくりとくるところの、すべての武器はみな彼自身に向けられて來るので、そこで資本家はますますやつきとなつて、たえず競争に勝利を占めることをたくらみ、現在の機械がまだ競争上の時代おくれにもならないのに、早くも高價な新機械を買込んで、新しい分業法でやりだしたりする。

かういふ熱狂的な躍起運動が全世界の市場において、一齊に起りつゝあることを想像せよ。しからば資本の増殖、集積、および集中のために、分業の進歩と、新機械の使用とが、如何に猛烈に、不斷に、急速に、層一層の大規模をもつて行はれつゝあるかが、分るであらう。

しかし、生産資本の増大と不可分なるこれらの事情が、賃金の決定に對して、果して如何なる影響を及ぼしてゐるか。

分業が進歩すれば、一人の労働者が五人、十人、二十人分の仕事をなしうる。従つて労働者間の競争が五倍、二十倍に増加する。

また、分業の進むにしたがつて、労働が單純化する。労働者の特殊な熟練が價値を失ふ。労働者はだゞ一箇の、單純な、單調な生産力に化する。その労働は誰にも出来るものになる。だから競争が各方面から起つてくる。なほ労働がかやうにしてますます單純になり、その修業がますます容易になれば、前にいつた通り、その生産費はますます少

くてすむことになり、従つて賃金はますます下落することになる。

故に、労働がますます不愉快なものになれば、競争はますます増大し、賃金はますます下落する。そして労働者は、今までよりも永く働くか、或は同じ時間内に今までよりも多くの仕事をするか、とにかく今までよりも多く働いて、賃金の總額を維持しようとする。かくて彼はやむなく分業の悪結果を増大する。その結果は、働けば働くほど賃金が下るといふことになる。

機械はそれと同一の結果を、遙かに大規模でもちきたす。即ち熟練労働を不熟練労働に代へ、男を女に代へ、大人を小供に代へる。

以上、我々は、資本家同志の間における産業戦を大づかみにスケッチして見た。この戦争の特徴は、労働軍を徵集するよりも、それを除隊することによつて勝利がえられるといふ點にある。大將たる資本家等は、誰が産業兵士の最大多數を除隊しうるかを、競争してゐるのである。

もつとも、經濟學者等は、機械のために餘計者となつた労働者は、新しい雇はれ先をみつけどすといつてゐる。けれども彼等もさすがに、解雇された労働者等が直接に、新しい産業部門に仕事をみつけだすとはいはない。さういふ嘘に對しては、事實が餘りに明白である。畢竟、彼等が主張するのはたゞ、労働階級の他の構成分子のために、（たとへば、いま廢止された産業部門に、これからはいらうとしてゐる青年労働者のために）何か新しい職業が開かれるといふに過ぎない。これは如何にも、廢物の労働者にとつて大いに有難いことに相違ない。資本家諸君にとつて、搾取さるべき新鮮な血と肉との不足する氣遣ひはない。死ぬるものは勝手に死なせるに限る。それでこの事實は、労働者のためよりも、資本家自身のために、より多くの慰藉をあたへるものである。もし賃金労働者の全部が機械のために亡びるのであつたら、（資本は賃金労働なしには存在しないのだから）それこそ資本にとつて大變なことだらう。

しかし、いま假りに、機械のために直接その仕事を奪はれた人々、並びにその産業部

門にはいれる機會を待つてゐる青年労働者等が、悉くみんな新たな職業をみつけどしたとする。その場合、彼等は果して、元の仕事と同じだけの賃金をその新職業からえられるものと信じられるだらうか。それはあらゆる經濟法則に反することである。近世産業が常に複雑な、高級な、仕事から、單純な、低級な、仕事に移つて行くことは、前に述べた通りである。しからば機械のために放りだされた労働者の群が、賃金の一層低い方面より外に、隠れ場をみつけださうする筈がない。

たゞその例外だといはれるものが一つある。それは機械そのものの製造に使はれる労働者である。産業界に機械の需要と消耗とがより多くなれば、機械の製造に労働者を使ふことがより多くなる。そしてこの部門に使はれる労働者は、熟練あり教育ある労働者だといふのである。

この主張は、以前でも半面の眞理しかもつてゐなかつたが、一八四〇年以後になつては、全くその眞理らしい外觀をも失つてしまつた。といふのは、今日では種々雑多な機

械が、機械そのものの製造のために、廣く使用されることになつたので、機械工場に使はれる労働者は、精巧を極めた機械の傍らに立つて、甚だ馬鹿げた機械の役を勤めるに過ぎないからである。

但し、機械のために解雇された男工の代りとして、その工場では恐らく三人の子供と一人の婦人とを雇ふだらう。しかしその男工の以前の賃金は、一人の婦人と三人の子供とを養ふにたる筈ではなかつたか。最低賃金は労働階級の存続と蕃殖とを遂げしめるにたる筈ではなかつたか。しからは彼のブルジョアの言ひ草は一たい何を意味するのか。外でもない。労働者の一家族の生計を營むために、今では以前にくらべて四倍の人命が消費されるといふことだ。

これを要するに、生産資本が増大すればするほど、分業と機械の使用とがますます擴張される。分業と機械の使用とが擴張されればされるほど、労働者における競争がますます烈しくなり、その賃金がますます下落する。

おまけに、社會のやや上層から、小企業者や、小資本の利子で食つてゐた人達が、労働階級に落ちこんでくる。彼等は銘々の腕を労働者の腕とならべて差出すより外に能がない。かくて仕事を求めるために差出される腕の林が段々に茂つてくる。そしてその腕は段々に瘦せてくる。

成功の第一要件が大規模の生産にある時、小企業者が競争に堪へえないことはいふまでもない。また資本が一般に大きくなれば、その利子が低くなること、従つて小資本家は最早利子だけで食へなくなること、従つて、彼等が苦しまぎれに小企業者の列に加はり、プロレタリアの候補者の數を増すこと、これらもまた説明を要しない。

最後に、資本家は前述の情勢に迫られて、現存の巨大な生産手段をたえず一層の大規模に擴張せねばならぬことになり、そのためには、また、信用制度（金融機關）のあらゆるばね仕掛を働かせることになるが、その進行の程度に應じて、産業上の地震（即ち恐慌）が頻發する。この地震の最中、商業界はその富、その生産物、甚だしきはその生

産力の一部を、下界の神々の犠牲にして、それでわづかに自己を保全しようるのである。この恐慌は、次の理由だけでなく、ますます頻繁になり、ますます激烈になる筈である。即ち生産物の分量と、従つてまた市場擴大の要求とが増加すれば、その増加の程度に応じて、世界市場はたえずますます縮小する。そして従來の恐慌の度毎に、まだ征服してゐなかつたところの、或はほんの軽く搾取してゐたところの市場を、世界的商業の領域内に組みこんでゐるので、その上搾取すべき新市場の残つてゐるのは、いよいよますます減少して行く。けれども、資本は労働を食つて生きてゐるばかりではない。高貴な、しかも野蠻な主君として、資本はその奴隷の死骸を、即ち恐慌の犠牲となる労働者の大群を、悉く自分のために殉死させる。かくして我々は知る。資本が急激に増加すれば、労働者間の競争が一層急激に増加する。そして労働階級のための職業手段および生活手段が、それに應じて一層急激に減少する。しかるに、それにもかゝはず資本の急激な増加は賃金労働のために最も好都合な條件である！ (終)



昭和二十一年一月十日 初版印刷
昭和二十一年三月十五日 再版發行
昭和二十一年八月十日 三版發行

定價二圓九十錢
特別行爲稅十錢
合計實價參圓

資本と労働の貨

版	樓
所	有

譯者 堺 利 彦

發行者 藤 岡 淳 吉

印刷者 岩 崎 史 郎

配給元 日本出版配給株式會社

東京都神田區駿河臺二丁目十番地
東京都京橋區美町三丁目十二番地
東京都神田區淡路町二丁目九番地

發行所

東京都神田區 株式會社 彰 考 書 院
駿河臺二丁目十番地

會員番號A一〇九〇二一號
電話神田(25)二七五七番
振替口座東京八二一五五番

印刷所 株式會社 大倉印刷

(お読み) 本書の定價が戦前の出版物に比し餘りにも高いことは刊行者の深く遺憾とするところであるが、現下の生産コストをもつてしては残念ながら事情やむを得ない。この段あしからず御諒承を乞ふ。

1012
(E)
92



終

